

1 た・づ・な

競馬の歴史と伝統に挑むスポーツ科学

日本中央競馬会 競走馬総合研究所 所長 和田 隆一



今年の夏は北京でオリンピックが開催されます。前回のアテネ大会では、日本は史上最多となるメダル 37 個（金 16、銀 9、銅 12）を獲得し、大いに盛り上がりました。大会期間中、連日、テレビで放映される日本人選手の活躍は、私たちに大きな興奮と感動を与えてくれました。個人的に印象深かったのは、一つは男子体操で、団体総合優勝のかかった場面でアンカーの富田洋之選手の鉄棒演技がフィニッシュするまで、ハラハラ・ドキドキしっ放しでした。また、女子マラソンでは世界記録保持者のポーラ・ラドクリフ選手が途中棄権するほどの猛烈な暑さの中で、野口みずき選手の快走に胸が熱くなりました。この“興奮と感動”がスポーツの醍醐味であり、とくにオリンピックのような国際大会では民族、国家といった意識も加わって、より増幅されるようです。

アテネ五輪での日本チームの大活躍は、国立スポーツ科学センターのサポートによるところが大きく、スポーツ科学の成果といわれました。その国立スポーツ科学センターがヒトのアスリートのための強化施設であるとするれば、私が「た・づ・な」をあずかる J R A 競走馬総合研究所（総研）は競走馬を専門とする総合研究機関です。とくに力を入れているのが、「世界に通用する強い馬づくり」をめざして、スポーツ科学の面から競走馬を支援する研究です。これは、獣医学を基礎として、フィットネス、メディカル、栄養など多方面から競走馬を総合的にチェックし、走能力向上に必要なデータを提供したりアドバイスをしたりするものです。総研では、美浦および栗東トレーニング・センターの競走馬診療所や軽種馬育成調教センター（BTC）とも協力して、強い馬づくりに役立つ科学と技術の普及に努めています。

ところで、オリンピックの 100m 競走などでは黒人選手が圧倒的に強く、ヒトには遺伝的に身体能力の差があるように思われますが、競馬の選手であるウマにはそれがほとんどありません。国際競走に出てくるウマは、日本馬も外国馬もサラブレッドです。いわゆる血統という点でも、最近のわが国の競走馬は、競馬先進国の競走馬と比べても見

劣りすることはありません。

もう一つ、競走馬の能力に影響を及ぼすと考えられる要因が育成調教の環境です。これも、日高地区の育成調教施設、美浦および栗東トレーニング・センターの調教施設、その他民間の施設など、諸外国と比べて遜色はありません。むしろ立派なくらいです。このような状況をみれば、わが国の競走馬は世界を相手に充分戦っていけると思います。現に、2005年にアメリカンオークスを勝ったシーザリオ、2006年のメルボルンカップを制覇したデルタブルースなど、ここ数年の日本馬の活躍は目を見張るものがあります。このように、わが国の「強い馬づくり」は着実に成果をあげてきています。

こういう上げ潮ムードのなかで、希代の名馬ディーブインパクトが現われ、2006年10月の凱旋門賞で世界の頂点をめざしました。結果はご存知のとおり、ディーブインパクトをもってしても勝つことができませんでした。それどころか、このレースでは欧米の競走馬のレベルの高さと層の厚さをあらためて痛感させられました。

ディーブインパクトの敗因について、歴史と伝統の差だという人がいます。たしかに、わが国の近代競馬の歴史は欧米に比べて浅く、見様見まねだけで馬の改良をやっていたのでは、なかなか追いつけないかもしれません。こういう状況でこそ、日本人の知恵が試されるような気がします。私は競馬の歴史と伝統の差を詰めるには、科学が一つの有力な武器になると信じています。JRA総研は、競走馬のスポーツ科学を究めることで、日本のウマとホースマンを支援していきます。